

社会における女性の進出や活躍は喜ばしい限りです。一方で女性の晩婚化や生殖補助医療（不妊治療）の発達により、高齡妊娠の頻度が高まっており、妊娠初期から十分な妊婦さんの管理が必要です。

妊娠は、ひとりの女性のひとつのボディに2つ（あるいはそれ以上）の生命が宿っている状態です。女性のからだにはこの状態を許容する予備の能力が備わっていますが、加齢により妊娠に対する予備能力は小さくなっていきます。血管に対する負荷をからだは補えなくなると、妊娠高血圧症候群や腎臓に障害が現れたり、耐糖能といわれる糖を摂取したときの代謝能力が弱まって妊娠糖尿病が発症しやすくなったりします。妊娠初期から慎重な管理を行っていても、ときにはこれらの疾患の症状の進行をとめられず、やむを得ず早産で出産したり、帝王切開術による分娩に移行せざるを得なかったりすることも十分考えられます。子宮筋腫などの婦人科疾患の合併率も上昇し、流産や早産の危険性は高くなります。分娩の際も、若い女性に比べ産道の進展性が乏しくなって難産になりやすく、帝王切開率の上昇につながります。

◎ 「出生前遺伝学的検査」ってどういうもの？

年齢を重ねた妊娠についてメディアでよく取り上げられるのは、生まれてくるお子さんの染色体の数の異常が多くなる可能性です。生まれてくる前にこれらの異常を診断することを、出生前遺伝学的検査といいます（74ページ参照）。染色体の異常の確率が高いと判断されると、絨毛検査をしたり15週すぎに羊水検査を行ったりして確定診断します。妊婦さんの血液中にまぎれこんでいる赤ちゃんのDNAを解析して赤ちゃんの染色体の異常を調べる方法も行われています。いずれにせよ確定診断のために羊水検査が必要になります。

出生前遺伝学的検査は全員が受けなければいけない検査ではありません。高齡妊娠のご夫婦でも、こういった検査を受けない決断をするカップルも多くいらっしゃいます。出生前遺伝学的検査を受けるか受けないか迷ったときは、カップルで専門家によるカウンセリングを受けることをおすすめします。

【出生前遺伝学的検査の種類と時期】

